

漁師着“ドンザ”からみた淡路島の藍染文化の特徴とその継承

岡本佳奈、嶽山洋志（兵庫県立大学大学院/兵庫県立淡路景観園芸学校 緑環境景観マネジメント研究科）

背景・目的



兵庫県に属する淡路島には「ドンザ」と呼ばれる、藍で染めた木綿布を数枚重ね、防寒や補強のための刺し子を施した漁師着がある。「板子一枚下は地獄」と言われるように、漁師の仕事は厳しく、女性たちは、魔除けや豊穡の意味をもつ麻や柿など植物の模様を刺し子することで、身の安全を願ったようだ。淡路島では昭和初期までは普通に見られたが、最近では知る者もほとんどいなくなり、北淡と洲本の資料館に数点残るのみとなっている。

一方、淡路島の産業界ではドンザに注目する動きもあり、紺屋などのランドスケープ遺産も含めた藍染文化の再評価と継承の仕組みづくりが求められている。そこで本研究ではドンザを取り巻く淡路島の藍染文化の特徴を明らかにするとともに、その継承のあり方について考察することを目的とした。具体的には、淡路島における「1.ドンザの残存実態とその地理的特性」、「2.紺屋の分布と屋敷構の特徴」について報告する。

1. ドンザの残存実態とその地理的特性

淡路島におけるドンザの残存実態を把握すべく、老人クラブ長を対象としたアンケート（期間：9月7日～10月15日、対象者数：340人、年齢：60～80代）と、漁協を対象としたヒアリング調査（期間：5月25日～6月16日、対象漁協：全17箇所）を実施した。

【1.淡路島におけるドンザの所有および認知状況（対象：老人クラブ長）】

1. 「ドンザという言葉を知っている、あるいは聞いたことがあるか」、「ドンザを持っているか」

表1. アンケート集計結果1

	洲本市	南あわじ市	淡路市
回答者	45人/60人中 (75.0%)	77人/167人 (46.1%)	71人/113人 (62.8%)
知っている・聞いたことがある	12人 (26.6%)	26人 (33.7%)	31人 (43.6%)
持っている	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

【結果】35.7%とおおよそ3人に1人がドンザを認知しており、特に淡路市の認知度が43.6%と高かった。所有者は確認できなかった。

2. 「ドンザという言葉を知っているあるいは聞いたことがあるか」で「はい」と回答した人の当時のエピソード

表2. アンケート集計結果2

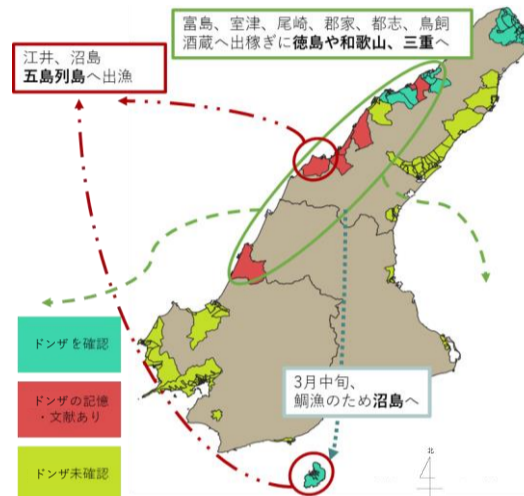
場面	使われ方例	件数
沖合	冬場は祖父がそれを着て小さな漁船で沖へ鮨を釣りに行っていた (85歳女性)	3件
作業場	漁港で漁師の人が網の縫いをする時に着ていた記憶がある (77歳男性)	3件
焚火を囲む・防寒着	昭和20～24年頃高齢の漁業者あがりの人達が冬場、ドンザをまといながら焚火を囲み、暖をとっていた記憶がある (83歳男性)	6件
家	母が縫い、冬だけ主人や息子が着ていた (年齢不詳女性)	4件

【結果】ドンザは冬の防寒具として使われていることが分かった。また沖合や作業場、焚火を囲んでの団らんの場など、多様な場面での記憶が語られた。

【3.ドンザの分布特性：淡路島の西海岸での偏り】

漁村へのヒアリング結果

- ・冬は漁ができないことがあるので、徳島へ出稼ぎに行っている人もいた。(一宮在住、72歳)
- ・西海岸の冬は季節風がきつく、何日も漁ができない時もある。(尾崎在住、67歳)
- ・戦前、家の人は出買舟で朝鮮半島の方へ、生の魚を買って来た。北淡の富島の漁師は、九州に出稼ぎに行く人も多く、魚と一緒に九州からの嫁さんが付いてきた。(室津在住、77歳)
- ・冬は遠くまで出稼ぎはせず、洲本へ鯛漁に行く人、あるいは土方（建築）をしていた人もいた。(釜口在住、87歳)
- ・戦前でも軍の施設があったので、漁ができなくても、何かしらの仕事はあったと思う。(由良在住、年齢不詳)



■結果

ドンザの認知度が高い淡路島の西海岸は、冬の西風が強く、漁に出られないことが多いことが分かった。そのために、阪神方面や、徳島、三重、和歌山などの酒蔵へ杜氏として出稼ぎに行く人、あるいは朝鮮半島へ魚を買って行き、それを地元あるいは大坂などの都市部へ売りに行く人、さらに九州や徳島にも出稼ぎに行く人がいたことを確認した。一方、釜口や由良など、島外に出稼ぎに行く必要のない地域ではドンザの認知度が低かった。

図1. 漁師の出稼ぎ航路及びドンザの認知及び所有状況

参考文献：(1985)『幕末・明治初期 五島へ渡った淡路の人びと』社団法人大阪友誌

【2.淡路島のドンザ所有及び認知状況（調査方法：ヒアリング・文献）】



【結果】全部で9着の個人所有のドンザを確認することができ、内1着は徳島で着られていたものであった。

総合考察

- ・今回の調査で確認できた個人所有のドンザは9着と極めて少なく（また高齢者でも知る人が少なく）、忘れられた遺産となりつつあることが分かった。
- ・ドンザの所有や認知度が高い淡路島の西海岸は、冬の西風の強さの影響などにより出稼ぎに行く者が多く、その際に訪れた地方でドンザを知り、その文化が島内にも広がったのではないかと推察される。

2. 淡路島の紺屋の分布と屋敷構の特徴

13軒の紺屋の位置・家屋を特定

6月16日に徳島県立博物館を訪問、江戸期の淡路島には三木與吉郎という徳島の藍玉商と取引のあった紺屋が110件存在するなど、非常に多くの紺屋が淡路島に存在することを確認した。一方、上記のアンケートやヒアリング情報に、島内で地域づくりに取り組む活動家2名から提供された情報を加え（6月14日、9月24日）、昭和初期まで紺屋であったことが確認できた家屋は、淡路島で13軒と、極めて少なくなっていた。

参考文献：松永友和（2020）『江戸横藍商の取引先について』

紺屋の分布と水系との関係

13軒の紺屋すべてが川沿いに位置していることが確認できた。紺屋では糊を洗い流す作業など、多くの水を使用することから、川沿いに発達したものと考えられる。また訪問ヒアリングで13軒中4軒に井戸があり、一定の温度に保たれた井戸水は、染料で利用する水として適していたようである。淡路島は水に乏しく、農業に井戸水や湧水を使う地域もあるが、今回の調査で藍染でも井戸水を使っていたことが明らかとなった。



図2. 淡路島における紺屋の分布図

屋敷構の特徴 - 萩原家を事例に -

13軒の中でも、南あわじ市福井賀集にある萩原家には、当時の屋敷構の特徴が今も色濃く残っていることから、7月19日に訪問、屋敷を構成する施設とその使い方について考察することとした。

まず洗い作業に使用していた水は2つある井戸水を使用、染めた後の水は近くの田んぼに肥料として流していた。また長屋門では牛を飼い、その糞を堆肥として活用していたが、その一角に藍玉を保管するスペースを確保、前庭は染色後の布を乾燥させる場として活用されていた。このように淡路島の伝統的な屋敷構をうまく活用しながら藍染をしていたことがわかる。その他、染色用の藍甕はAの位置にうめられ、夏季以外は染料を保温するために火が炊かれていたり、染め物は長屋門で販売されていたりもした。



図3. 萩原家の屋敷図

まとめ - 継承に向けて -

調査の中で、多くの方から、阪神淡路大震災で家が潰れ、全部捨ててしまったという声をよく耳にした。また、調査対象のほとんどが戦前の物であり、今に残っているものは大変価値のあるものと考えられる。これら島で培われた文化・産業を忘れられたものとしないうちに、島内の染師や織師らと企画展（10月29～31日）を開催、未来に向けた継承活動に繋げている。



企画展のフライヤー